

# 青刈大豆の品種と作り方

福井重郎

冬作の緑肥作物はその種類が多いが、夏作としては適当なものが比較的少い。夏作の緑肥作物の中では先ず第一に青刈大豆をあげるべきであろう。

青刈大豆の効能についてはいまさら言うまでもないが、その中には窒素、燐酸、加里をそれぞれ〇・五六％、〇・〇八％、〇・七三％も含んでいるので、反当五〇〇貫の生草量が得られると窒素、燐酸、加里をそれぞれ二貫八〇〇匁、四〇〇匁、三貫六五〇匁を得られることになる。なお青刈大豆中の燐酸や加里は過燐酸石灰や加里塩と大体同じくらいの効き目があるといわれている。

その上、今一つよい点は緑肥として大豆を作ると他の作物では吸収しにくいような型の燐酸、言いかえると土の中で普通眠っているような燐酸までも活用できることにある。だが緑肥大豆の最大の効果は何といつても窒素と有機物にある。とりわけ窒素は殆ど硫酸に近い肥効を示すことが知られている。また緑肥大豆から得られる腐植の量は堆肥のそれにくらべると少いが、それでも地力を高める力を土に与るのに大いに役立つ。

これまでわが国では緑肥作物は余り作られなかつた。北海道ではともかくとして、その他の地方では青刈大豆は水田の麦の間作として、また桑園や果樹園の間作としてわずかにつくられて来た。しかし最近は単に緑肥としてだけでなく、家畜の飼料を兼ねた緑肥作物として青刈大豆の利用が急激に増して来ている。

水田で麦の間作として作る場合も上手に栽培すると反当生草三〇〇貫くらいはとれる。これは硫酸八貫に相当する窒素を含んでいることになる。水田で麦の間作にする場合は稲の植付けまでに大豆を刈取らねばならないので、大豆を麦の間にいつ頃播くかということが大切な問題になつてくる。そこで青刈大豆の適当な播種期は九州、四国地方では三月上旬から下旬、東海、近畿地方では三月上旬から四月上旬、関東地方では先ず四月上旬から下旬といったところであろう。いずれにしても

大豆の根瘤菌を種子に付け麦の畦の両肩か畦間に反当にして四升程度を条播するか三〜四寸おきに三〜四粒ずつ点播するとよい。播種後、完熟堆肥一〇〇貫に過燐酸石灰三〜四貫をよく混ぜたものを施し、出来得ればその上に軽く覆土した後木灰を一〇貫くらいも施せば非常に成育がよい。その後の管理としては葉が三〜四枚出た頃土寄せを行い雑草を防ぐ程度でよい。



見事に生育している青刈大豆

桑園間作の場合は播種期が四〜五月頃が適当である。果樹園では大豆を刈取り緑肥として施す時期と果樹園の手入れの時期との関係をよく考え、三月から五月の間に適宜播くとよい。桑園では普通一条、果樹園

では樹と樹の間の広さによつても異うが、病害虫の防除作業に不便でないように一尺五寸くらいの間隔に二〜三条に播く。従つて播種量も一概にはいえないが、反当四〜八升くらいが適当であろう。施肥量やその後の管理については水田の場合と同様である。

青刈大豆の品種は茎葉がよく繁茂するところが第一の要件である。もちろん青刈大豆にも色々あつてそれぞれの品種がもつている特性がこれを栽培する土地の風土に合致するものを選択しなければ満足な結果は期待できない。種実を目的とする大豆の品種については、これらの点がかなり明らかになっているが、青刈大豆は未だ不明の点が多い。だが大まかにいつて九州、四国、中国地方では北海道産黄色大豆、秋田大豆、茶千石、いざり等がよく、東海、関東地方では幾内黒千石をはじめその他黒千石、黒田六尺、東北では刈系一号をはじめ茶小粒、青千石、黒田六尺、北海道では茶小粒をはじめ青千石、黒田六尺等が適当である。最近「大葉つる豆」が暖地はもちろん全国各地でその栽培が行われているが緑肥、飼料兼用として極めて優秀なものといえよう。

ある品種がその土地に本当に適合するか如何かを知るためには小規模に試作してみることが大切である。

最後に緑肥大豆で問題になることは種子の入手方法である。この点については、それぞれの県の農業試験場や普及員の方々とよく相談して確実なよい品種で、発芽力の確かなものを求めることが何よりも大切なことである。

(筆者は農林省関東々山農試・技官)